



「助けて」と言えない孤立に向き合う —赤ちゃんのいのちを守るプロジェクトから



大江 浩さん

社会福祉法人賛育会 法人事務局

赤ちゃんのいのちを守るプロジェクト 事務局長

社会福祉法人賛育会（以下、賛育会）は、「赤ちゃんのいのちを守るプロジェクト」（以下、プロジェクト）として、運営する病院で「内密出産」とベビーバスケット（匿名の新生児の預かり）を始めました。開始から約1年、プロジェクトの現場から見てきたのは、「誰にも頼れず、助けてと言えない」孤立する人々の姿でした。プロジェクト事務局長の大江浩さんにお話をうかがいました。

賛育会の「原点」とプロジェクトの設立

プロジェクト（※）の設立は、賛育会の歴史とも深く関係しています。賛育会は1918年、困窮する母子を対象とした無料医療相談を始め、翌年には日本初の庶民向けの産院を開始しました。母子の保護・救済はいわば賛育会の「原点」です。

そして今、予期せぬ妊娠に悩み、孤立出産の末、赤ちゃんの遺棄や虐待死に至る痛ましい事件が起きています。賛育会はこうした孤立のゆえに起こる深刻な社会課題を看過できず、「原点」に立ち返り、プロジェクトを始めました。

（※）「赤ちゃんのいのちを守るプロジェクト」の3つの事業

- ①妊娠したかもSOS 賛育会:夜間の匿名電話相談（2024年7月開始）
- ②内密出産：病院の一部担当者にのみ個人情報を出産すること（2025年3月末開始）
- ③ベビーバスケット：匿名での新生児の預かり（同上）

現場から見える母の孤立と社会課題

内密出産で生まれた赤ちゃんや匿名で預け入れられた赤ちゃんは、児童福祉法の下で児童相談所が関与し、乳児院や里親養子縁組などへ命が繋がれていきます。一方で、出産した女性に対する支援は、それと比べて十分とはいえません。

孤立する妊婦はそれぞれに様々な事情を抱えています。内密出産の希望者は、葛藤する余地すらないほど差し迫った状況で、時間をかけて相談するゆとりもないまま飛び込みに近い形で来院する例もあります。誰にも相談できず、一人で抱え込んだ末にようやくたどり着いたのだと思います。

利用者・相談者は、生活困窮の問題を抱え、かつ社会的自立がぜい弱で孤立無援状態にあるケースが少なくありません。家庭以外の人間関係においても安心できる居場所を見つけられず、いわば「社会のセーフティネットから抜け落ちている」状態にあることが浮かび上がります。

根底には、「愛された記憶」「守られた経験」「許され、助

けられた経験」のないまま年齢的な成長だけになっているという現実があるのかもしれませんが。それは個人の問題というより「社会的な病」のようなものではないでしょうか。

だからこそ、「助けてと言えない」人にとっては、匿名の相談窓口は少しだけハードルが下がるのかもしれませんが。妊娠SOS相談は、「待つ支援」「聴くことを通して、痛みに寄り添う支援」です。相談者の中には、「初めて自分の話を聞いてくれた。ありがとう」と涙ながらに話す10代の子もいます。

ただ、目に見えないSOSの声にどう関わっていくのか、支援はどうあるべきかは、難しい問題です。答えはありません。模索を続けていかなければならないと思っています。

ベビーバスケットが不要となる社会へ

人と人との関係をつなぐのは、「愛情」です。それは信頼関係の証でもあります。現代社会では、そうしたつながりが失われつつあり、「関係性の貧困」が静かに進行しているのではないかと感じています。追い詰められ、孤立出産の結果、「ベビーバスケット」という緊急手段を選択する可能性のある人は身近にもっとたくさんいるかもしれません。

虐待・いじめなどによって、人への不信感や拒否反応を持ちながら、育ってきた若者たちがいます。家庭から逃れ、ネットカフェなどを転々としながら、生きている若者たちがいます。そうした若者の孤立は、社会が作り出したともいえます。

地域や社会は、この現実を受け止めて、ともに考えていくことが大切です。もちろん、すぐに解決できる“特効薬”はありませんが、一人ひとりが想像力を働かせ、身近な誰かを大事に思う気持ちが少しずつ広がれば、社会は変わっていくと思います。

本来は、「ベビーバスケットが不要な社会」であるべきです。プロジェクトは出発点であって、賛育会がめざすのは、母子のいのちに限らず「すべてのいのちが守られる社会」です。福祉、医療、行政など、関係する皆が協力して、その社会をめざしていけることを願っています。



赤ちゃんのいのちを守るプロジェクト